

原子力

「原子力」に回帰する 世界のなかで

田中 知 東京大学大学院教授



今、世界各国で原子力発電を再評価し原子力に回帰する動き——いわゆる「原子力ルネサンス」が起きている。

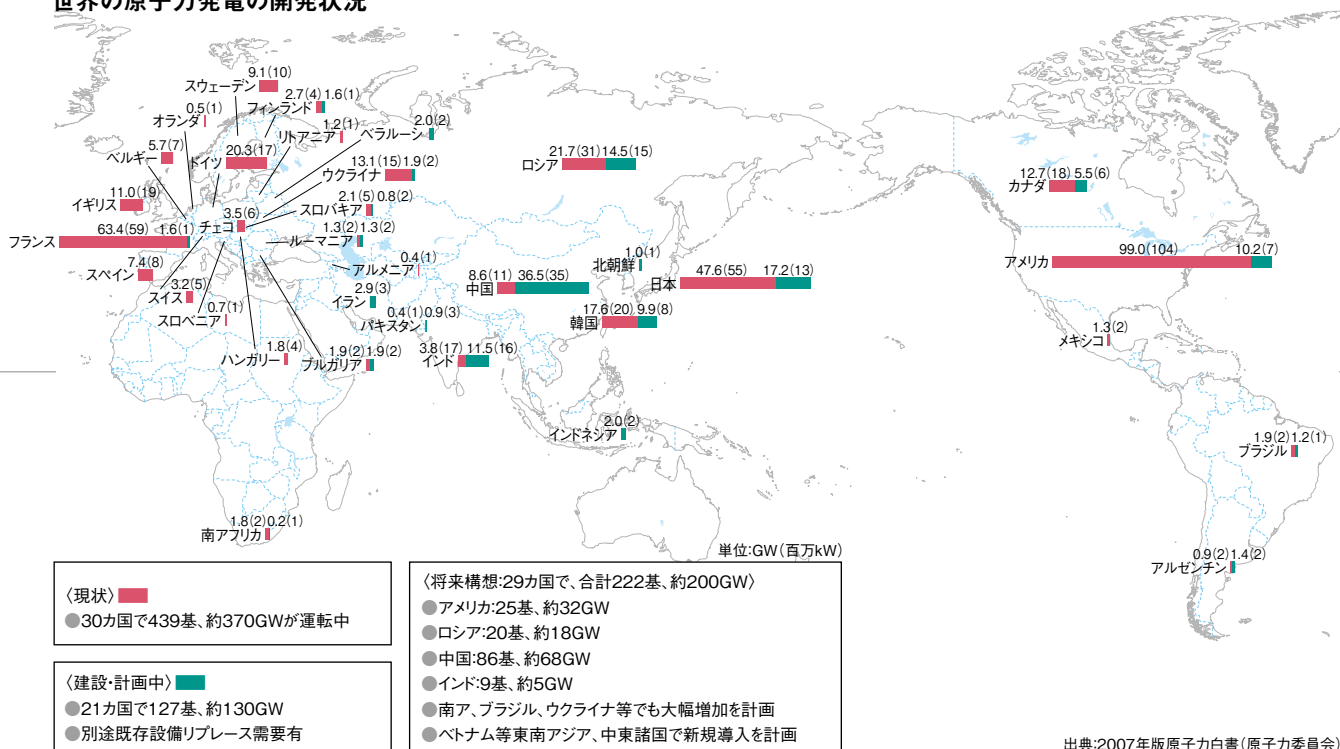
例えばアメリカでは、一九七九年のスリーマイル島原子力発電所の事故以来凍結していた原子力発電所の建設を再開。現在、

七基の建設計画が進んでおり、将来的にはさらに二十五基の建設構想がある。またヨーロッパでも、八六年のチェルノブイリ原子力発電所の事故以降、新規開発に慎重な姿勢だったイギリスや、いったんは撤退を決めたイタリアなども、政策の見直しを始めている。

一方アジアに眼を転じると、こちらはルネサンスどころか、まさに伸び盛りだ。韓国は原子力の発電電力量比率五〇％程度を目指しているし、中国やインドでも建設計画が目白押し。中国では、現在十一基が運転中だが、建設計画や構想を見ると、二〇三〇年には百三十基以上の原子力発電所が動くことになる。こうした原子力回帰の背景の一つが、深刻化する地球温暖化問題であることは間違いない。二〇〇八年の洞爺湖サミットの首脳宣言で、原子力を温室効果ガスの排出量を減少させる不可欠の手段と見なし、原子力計画への関心を示す国が増大していることを明言したのも記憶に新しいところだ。

とはいえ、原子力発電だけで

世界の原子力発電の開発状況



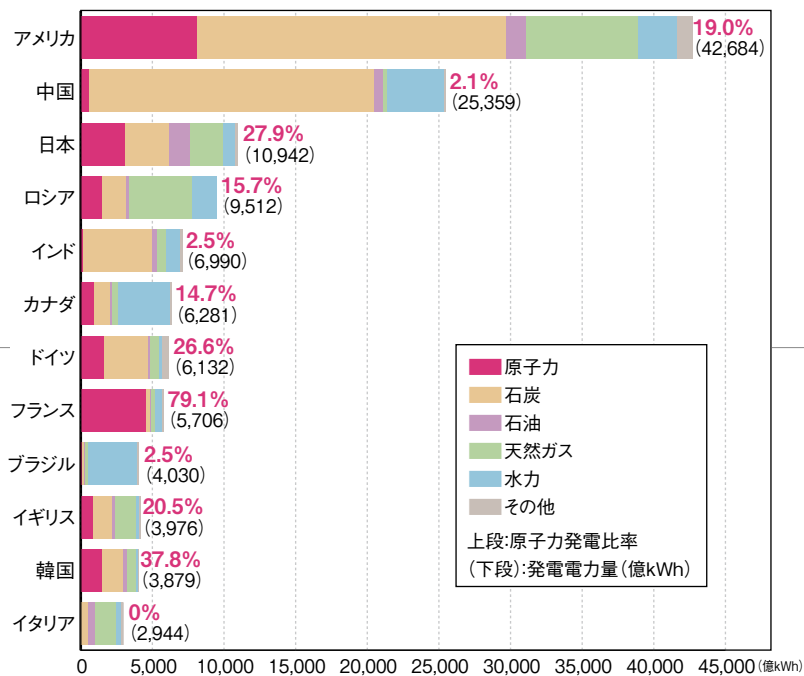
出典:2007年版原子力白書(原子力委員会)

温暖化を食い止めようとすれば、二〇五〇年には世界で約千五百GW（1GWは百万kW）の原子力発電所が必要との試算もある。現在は四百三十九基、約三百七十GWだから、新たに約千基の発電所をつくらないといけない。これは容易な数ではないが決して不可能なことではない。地球環境問題解決という観点では全世界的にこれを実現していく必要

がある。

同時に原子力回帰を促している大きな要因は、原油価格高騰や資源枯渇への懸念からくるエネルギーセキュリティの問題だろう。実際、各国の資源獲得競争は熾烈化しており、イギリスが原子力発電推進へ舵を切ったのも、北海油田の枯渇をにらんだことだし、中国には急激な経済成長に伴う慢性的な電力不

主要国の原子力発電の割合（発電電力量）



出典: ENERGY BALANCES OF OECD COUNTRIES 2004-2005
ENERGY BALANCES OF NON-OECD COUNTRIES 2004-2005

足という事情がある。いずれにしろ、こうした状況下、発電時にCO₂を排出しない環境優位性や、ウラン燃料の供給安定性といった観点から、原子力開発に追い風が吹いている。

ただ持続的に原子力開発を進めていくうえでは、安全運転はもちろんのこと、放射性廃棄物の処理処分、核拡散リスクなどにきちんと対応していかなければならない。

世界屈指の技術力で原子力平和利用を先導してきた日本の役割は今後ますます重要になるだろうが、国際貢献を果たすには、まずは足元・国内をしっかりと固めておく必要がある。第一に、現在稼働中の原子力発電所を安全に安定して運転すること。また建設中三基を含む十三基の新増設計画や、プルサーマル計画、六ヶ所再処理工場の稼働を円滑・適正に進めること。そして若い技術者が日本の原子力の将来に希望を持てるよう、人材育成も含め、「原子力立国」の青写真をきちんと描くこと。これら一つひとつの課題を国内で

着実に進めてこそ、世界への飛躍も、国際貢献の道も開かれるのではないかと。

日本と同様、原子力発電の先進国のフランスは、電力会社も原子力メーカーも国と関係の強い一社の独占体制。一方、日本の原子力発電は、各地域に根づいた電力会社が担っている。地域に根づいているからこそ、緊張感を持って、より安全に安定して電気をつくり送り届けるという社会的使命感も強くなる。こうした特性を見据え、世界への貢献を視野に、日本ならではの「原子力ルネサンス」に取り組むことが、何より重要だ。



たなか さとし

東京大学大学院工学系研究科 原子力国際専攻教授
一九五〇年大阪府生まれ。東京大学工学部原子力工学科卒、同大学院工学系研究科原子力工学専攻博士課程修了。東京大学助教授を経て、九四年教授。核融合工学、廃棄物工学、原子力社会工学、原子力エネルギー俯瞰工学など研究。原子力委員会長期計画策定委員、総合資源エネルギー調査会委員等も務める。
<http://www.tanaka.r.t.u-tokyo.ac.jp/~chitanak/>

文化 「源氏物語千年紀」に想う

山本壯太 源氏物語千年紀委員会ゼネラルプロデューサー



それは千年前のことだった——日本の古典文学の最高峰であり、世界最古の長編小説でもある『源氏物語』の存在が初めて記録された。

源氏物語がいつ書かれたのか、正確な年月はわかっていないが、作者の紫式部は『紫式部日記』の中で、寛弘五（一〇〇八）年

十一月一日の敦成親王誕生五日祝いの夜、藤原公任から「あなかしこ。このわたりにわかむらさきやさぶらふ（このあたりに若紫さんがいらつしやるようですね）」と戯れかけられた、と記している。これが源氏物語に関する最古の記録であり、少なくともこの時点で巻五・若紫は完成していたことになる。

以来一千年。源氏物語は時代を超え、国境を超えて幅広い読者に読み継がれている。とりわけ海外での評価は高く、翻訳された言語は実に二十一種の国語。ユネスコの「世界偉人暦」に日本人として初めて紫式部が選ばれたり、米国ライフ誌で「この千年に世界を変えた百の出来事」の一つにランキングされるなど、単なる文学作品にとどまらない評価も受けている。

なぜ源氏物語はこれほど人々を魅了するのか。その理由の第一は、やはり面白いからだ。全五十四帖で登場人物は四百人以上、主要人物だけでも優に五十人を超えるが、一人ひとりのキャラクターが際立ち、構成も巧みで読者を飽きさせない。加え

宇治市源氏物語ミュージアム所蔵『源氏絵鑑帖』より「空蟬」



て紫式部自身の人生観である「心身世（しんしんせ）」——肉体と精神の葛藤、社会的存在としての苦悩は、現代にも通じるテーマ。いつ誰が読んでも共感できる普遍性を持っている。

かの文豪シェイクスピアに先立つこと六百年、ヨーロッパでは十字軍前後、中国では唐滅亡後の混乱によりやく北宋が終止符を打った頃、日本でこれほどの文学が女性の手によって生まれたことに驚きを禁じ得ない。当時、日本で女性文化が花開

いた背景には、平安期が比較的平和な時代だったことと「ひらがな」の発明がある。加えて日本固有の文化——豊穠な自然と共生する文化的風土が、女性が活躍する土壌にもなったのではないかと。

そしてもちろん、特筆すべきは紫式部の類いまれな才能だが、紫式部にしろ清少納言にしろ、平安期に活躍した女性は受領（諸国の長官。任国に赴き実際に政務を執る国司の最上席者）階級の人が多く、彼女たち

には京の都しか知らない宮廷人と違い、他の地域を見る機会があった。紫式部も父の任地だった武生（現・福井県越前市）への行き帰り、都の外の自然や風景、人の生き様を見聞することで、当時としては希有なほどの広い視野を得たのだと思う。そしてその経験が、京から伊勢、須磨、明石、住吉、石山、宇治と、関西一円を舞台とする作品を生む原動力になったのではないだろうか。

この卓越した文学作品の存在

宇治市源氏物語ミュージアム所蔵『源氏絵鑑帖』より「御法」



宇治市源氏物語ミュージアム所蔵『源氏絵鑑帖』より「初音」

が記録されて一千年を迎えたのを機に、源氏物語が後世の日本や世界の文化に与えた影響を再評価しようと、千玄室さん、瀬戸内寂聴さんなど八人の識者が「源氏物語千年紀」を提唱し、二〇〇七年一月に千年紀委員会を設立、源氏物語ゆかりの自治体や地元企業とも連携しながら、国際シンポジウムやフォーラム、演奏会や茶会、各種公演など、さまざまな記念イベントを行ってきた。

〇八年十一月一日には、「源

氏物語千年紀記念式典」を開催し、十一月一日を「古典の日」とすることを宣言した。今回の千年紀を一過性のイベントで終わらせず、今後も古典文学に親しむきっかけにしてほしいという想いからだ。

今、日本人の小説離れが進んでいる。実用的な知識ばかりがもてはやされ、「小説など何の役にも立たない」と言う人もいるが、決してそんなことはない。小説の中には人生がある。苦悩や挫折を乗り越える知恵、生きるための叡智が詰まっている。

まだ『源氏物語』を読んだことのない人はぜひ一度読んでほしい。一人でも多くの日本人が、この「日本の宝」の魅力に接してもらえればと願っている。 窪

やまもと そうた

源氏物語千年紀委員会

ゼネラルプロデューサー

一九四四年愛媛県生まれ。京都大学文学部哲学科卒。NHK入局。主にドラマ番組のディレクター、プロデューサーを務め、放送総局衛星放送第二部長、衛星放送局次長などを経て、九九年NHK京都放送局長。のちNHK文化センター常務取締役大阪総支社長を経て、現職。
<http://www.2008genji.jp/>

編集後記

晩秋の播磨、最相葉月さんと訪れた兵庫県神河町そして山崎では、人の熱い思いと人の手を経た自然の美しさに触れることができました。都会で忙しく過ごしていると、水車が回るような農村風景は遠い日の郷愁のように感じがちですが、私たちは日々その恩恵にあずかっています。

「農」をはじめ多くの人の手に支えられている私たちの「食」——「鼎談」では、加賀爪優さん、柴田明夫さん、木場弘子さんにお集まりいただき、日本の「食」を考えました。「食」は私たちの生命に直結する大事なことに、どこでどうつくられているかなど、ほとんど意識することもなく、あまりにも知らないまままで過ごしてきたのかもしれない。そこで「ルポ」では若狭の海の幸や丹波の山の幸、紀州の梅干しや醤油など和の幸、そして京野菜という都の幸まで、関西の食文化を辿り、担い手の方々の声を聞きました。

今年の冬は温暖化の影響か暖冬だそうですが、こうした気候の変化は、海にも山にも田畑にも良い影響を与えるとは限りません。この国の風土と歴史が培ってきた食文化を、次代に伝えていくためにも、脱・温暖化、低炭素社会の実現が急がれるのではないのでしょうか。

次の季節に向けてエネルギーを蓄える冬、飛躍への糧となる「旬の味」を届ける『躍』でありたいと願います。

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社取締役社長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。

<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室

発行人／川邊辰也 編集人／多田恭之

〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240

企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー